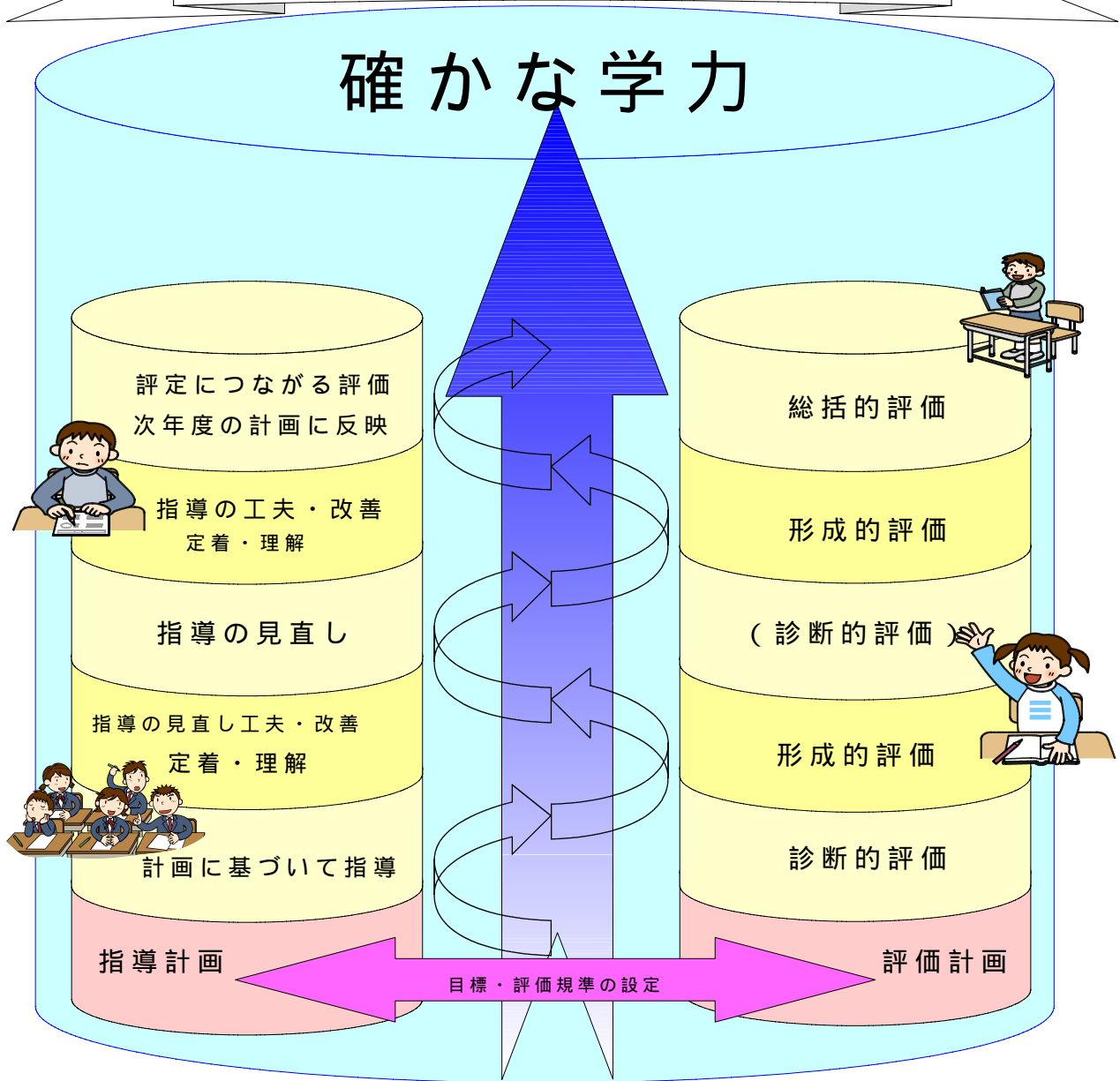


【視点3】

単元を通した意図的・計画的な評価を次の指導に生かしていくための工夫改善

## 評価を指導に生かす



### 1. 評価の充実と授業改善

授業を良くするためには？

子どもの学力を、「知識・技能」の量のみではなく、「意欲・関心・態度」や「思考・判断」を大切にするとともに、評価規準を明確にし、評価方法の工夫を図ることは、すなわち授業自体の改善である。学力を4観点または5観点で考えると、観点それぞれを高める指導場面が必要であることは言うまでもなく、指導したことについては、その成果と課題を評価して次の指導に生かすことが大切である。評価の充実と授業改善は表裏一体であり、我々教師は評価観の在り方を窓口にして授業そのもののあり方を常に自己点検しながら、よりよい授業の構築に取り組む必要がある。

### 2. 3つの評価

効率的・効果的な評価

評価は評価をする時期によって、(1)診断的評価、(2)形成的評価、(3)総括的評価の3つに分けることができる。意図的で計画的な評価をしっかりと立て、指導し評価することによって評価に対する客観性や信頼できるのである。

- (1) 診断的評価...単元を指導する前に子ども達の興味・関心や既習事項の定着などをとらえる評価。子どもの実態に応じた指導計画を組み立て、より効果的な指導をするために行う。
- (2) 形成的評価...単元を指導する過程で、目標の実現状況を捉える評価。子どもの一人一人の実現状況に応じ指導・支援するために行う。
- (3) 総括的評価...単元の終末に、単元の目標の実現状況をとらえる評価。その単元の指導がねらい通り行われたかどうかをとらえ、その後の学習などに生かすために行う。

3. 「いつ・どこで・何を・どのように」指導するのか？

指導計画と評価計画を充実させるためには、指導内容や学習展開と評価規準や評価の方法が一体となって構築されていなければならない。すなわち「いつどこで(場面)・何を(観点)・どのように(方法)」評価するのかということを経験計画に位置付ける必要がある。

指導計画と評価計画

- (1) 年間指導計画  
実際に指導計画を立てるときに同時に評価計画も立てることで、指導と評価を結びつけて考え評価がスムーズに行えるようにする必要がある。

国語科年間指導計画・評価計画

月	単元・教材	学習目標	学習活動	指導上の留意事項	評価の観点					評価規準	評価の場面と方法	学習指導要領との関連	備考	
					関	話	聞	書	読					む
7月	オツベルと象	1. 白象やオツベルにとって何が大切なのかを想像する。  2. 作品の構成や展開をとらえる。	1. 場面の移り変わりを考えながら、物語の内容をとらえる。  2. 表現や展開のおもしろさを発見し、内容を読み味わう。  3. 主題を考える。	1. 作者について、他の作品について詳しく触れる。	○						1. オツベルと白象の価値観やものの見方・考え方の違いをとらえ、自分なりの考えを持つ。 2. 同様の表現の繰り返しや語り手の存在など、作品の構成の工夫に気付く。 3. 語りの口調で表現されていることに気付く、擬声語や擬態語の働きに気付く。	ノート  ノート  朗読	関心  読むウ  言語ウ	

- (2) 単元の評価規準  
年間指導計画・評価計画をより具体的に考えていくためには単元の評価規準を考えることになる。単元を通しての身に付けさせたい力を明確にするものである。

＜本単元の評価規準＞

関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
・数の構成や10の補数などの学習経験を生かして、11～18から1位数をひいて繰り下がりのある計算のしかたを進んで考えようとする。	・18までの数の構成や10の補数に着目して計算の仕方を考える。	・11～18から1位数をひいて、繰り下がりのある減法計算ができる。	・11～18から1位数をひいて、繰り下がりのある減法計算のしかたを理解する。

( 学習指導委員会検証授業：単元名 小学1年「ひきざん」 より)

- (3) 単元の指導計画と評価計画  
さらに具体的に考えていくには、一単位時間の指導計画と評価計画を作ることになる。一単位時間の内容や目標、評価規準を作成することで、より正確に子どもの実情をとらえ、指導に反映することができる。また、指導のポイントを再確認することになり、評価をスムーズに行うことにつながる。

〈評価計画〉

	関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
1	これからの学習に対して、意欲と見通しを持つようとしている。 (発表)		既習事項を生かしながら、具体物の操作を行い答えを求めることができる。 (ワークシート・発表)	
2	具体物を操作し、自分の考えを表し、発表しようとしている。 (ホワイトボード・発表)	くり下がりのあるひき算のしかたについて、10のまとまりに着目して考えている。 (ホワイトボード)		
3・4			減加法による計算が確実にできる。	減数が8、7、6の場合でも、10のまとまりから1位数を

〈指導計画〉(全12時間/本時第2時) ◎は本時

段階(時数)	主な学習活動	評価規準・教師のかかわり
オリエンテーション(1)	<p>はたらきものりすさんは、どんぐりを13こも集めました。たくさん集まったので、何個か食べて、残りを土にうめようと思います。</p> <p>・「食えると」に自由に数をあてはめて式に表す。 ・未習の計算を見つける。 ・具体物を操作しながら、答えを求める。 ・既習の計算とどこが違うのか、気づいたことをまとめ、取り方を工夫できないか考え、次時の見通しをもつ。【補充】</p>	<p>・既習内容の定着の確認 ・既習内容が未定着の児童への支援 ・具体物操作の補助</p> <p>関：これからの学習に対して、意欲と見通しを持つようとしている。 表：既習事項を生かしながら、具体物の操作を行い答えを求めることができる。</p>

( 学習指導委員会検証授業：単元名 小学1年「ひきざん」 より)

4. 努力を要する子どもへの手だて

指導と評価の一体化

その時間に重点としている評価規準に照らし合わせ、努力を要すると評価した個への指導・支援の手だてをあらかじめ計画しておくことが必要になる。そうすることで、さらに指導と評価の一体化が図られ、よりよい指導が展開されていくと考えられる。そこで、単元導入前には診断的評価、指導に当たっては形成的評価、そして単元終了時には総括的評価を大切にしたい。

事前に既習を確認するレディネステストやレディネスチェックなどの診断的評価をともに、実態にあった単元計画を行うことで子どもが学びやすくなると考える。だが、実際に学習がスタートすると予想とは違った姿が多く見られてくる。そこで、必要に応じてミニテストなどの形成的評価を取り入れ、子どもの理解の度合いを確かめ、状況によってはフィードバックをしたり、あるいは次の関連の時にオーバーラップして指導したりしながら励まし、子どものつまずきを取り除いたり和らげたりして問題解決できるよう指導・支援をしていくことが重要となるのである。単元終了時には、単元全体でどこまで学習内容を把握できたかを総括的評価で見とり、必要があれば個に応じた補充指導などを行っていく。

子どもの確かな学びのために、評価した内容を指導に反映させていくことが大切なのである。

5. 学習の過程を評価し、指導の改善に生かす

評価を指導に生かす

評価を指導に生かすために重要なことは、子どもの学習状況を指導過程の中で評価し、それを次の指導の改善に反映するということである。ここで言う評価とは、子どもの学習の評価の他に指導の評価もあわせて考えていかななくてはならない。

これら学習の評価、指導の評価を、日々の単元の指導に生かし、基礎・基本の定着を図ることができる。さらに単元毎に指導を振り返り、次年度の計画へ日々の評価を反映させていくことで指導と評価の連関性が深まり、スパイラル形式でつながって授業改善されていくことになるのである。

児童・生徒の実態に応じて、より学習内容を定着させていくためにも評価と指導は切り離せないものである。子どもたちに基礎・基本を確実に定着させるためにも、日々の実践の中で常に心がけていかななくてはならない。

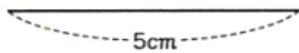
# 実践例 レディネステスト

## ③ 垂直・平行と四角形

5年	組	番
名前		

1 辺の長さが5cm, 6cm, 6cmの二等辺三角形をかきましょう。

80%

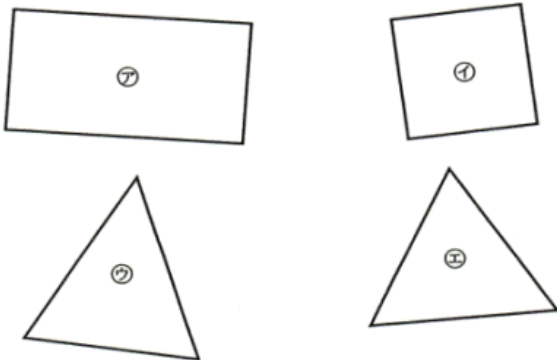


2 □にあてはまる数を書きましょう。

(1) 1直角 = 100%

(2) 1回転の角度 = 90%度

3 下の図形の名まえを書きましょう。

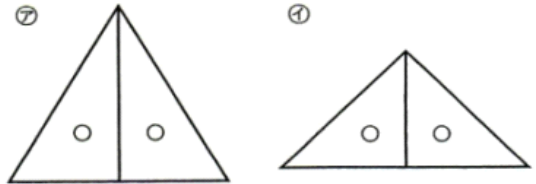


(ア) 66%      (イ) 66%

(ウ) 80%

(エ) 85%

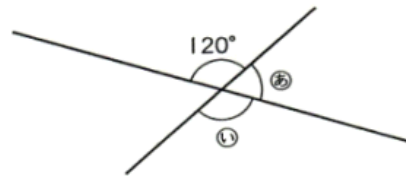
4 下の図のように、三角じょうぎを2まいならべると、それぞれ何という三角形ができますか。



(ア) 76%

(イ) 71%

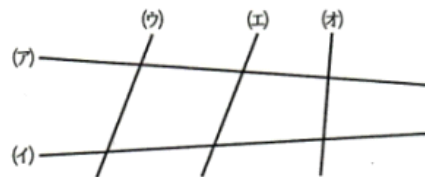
5 (ア), (イ)の角度は、それぞれ何度ですか。



(ア) 57%度      (イ) 66%度

次の問題は、まだ学習していません。挑戦してみましょう。

※ 6 下の図を見て答えましょう。



(1) 平行になっている直線は、どれとどれですか。

66%

(2) (ア)の直線に垂直な直線はどれですか。

90%

# 実践例 算数指導案

## 本時の展開 (2/12)

段階	学習活動	・教師の支援 ※留意点 【 】評価	
		《T 1の動き》	《T 2の動き》
つかむ5分	1. 前時の復習をする。 ・未習のひき算を確かめる。 2. 課題を把握する。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">13-9のけいさんのしかたをかんがえよう。</div> 3. 見通しをもつ。 ・3から9がひけないことに、着目する。 ・前時を振り返り、工夫した取り方を考えることを確認する。	※前時の掲示物を用いる。  ※オリエンテーションで確認したことを振り返られるようにする。	・前時の学習の振り返りがスムーズに進むように児童へ声かけをする。
考える15分	4. 自力解決 ・ホワイトボードで具体物を操作し、9のとり方を考える。 ・マーカーを用い、数字を使って表現する。 ア. 13から1つずつひいて、残りを数える。(かぞえ作戦) <div style="margin-left: 20px;">             □□□□■              ■■■ 987654              321              イ. 9を3と6に分けてひく。  <div style="margin-left: 20px;">               □□□□■                ■■■ 6                3                ウ. 10のまとまりから9をひく。  <div style="margin-left: 20px;">                 □■■■■■■■■                  □□□ 9               </div> </div>           ・終わった児童は、プリントで別の方法を考える。            ・近くの児童同士でお互いの考えを伝え合う。         </div>	※全員がホワイトボードを用いて、自由に表現できるようにする。 ※どんぐりの絵がかかれたマグネットを用いる。(裏・表あり)	・活動用のホワイトボードを提示する。 ・活動の補助をし、その中での見取りをもとに、必要に応じて考え方についての個別支援をする。
ねりあう20分	5. 全体交流 ・ホワイトボードに書いた考えを説明する。 ・友達の考えと、同じなのか、少し違うのか、別の考えなのかに着目して、聞いたり、発表する。 ・それぞれの方法の良いところを話し合う。 ・全体交流後に、自分がどの考え方なのか意思表示をする。	※児童の意見を、全体に広げながら話し合いを進める。 ・ブロックでの操作と結びつけて説明できるようにする。 ※減加法のよさについてもふれる。	・発表者または発表を聞く側への支援をする。 ・発表内容の理解が不十分な児童へ、補助説明をする。
まとめる5分	6. まとめる ・(ひきたしさをくせん) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">13を10と3にわける</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">10から9をひいて1</div> ・(ひきひきさをくせん) <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <math display="block">13 - 9 = 4</math> <math display="block">\begin{array}{r} 13 \\ - 9 \\ \hline 10 \quad 3 \end{array}</math> <math display="block">1と3で4</math> <math display="block">13 - 9 = 4</math> <math display="block">\begin{array}{r} 13 \\ - 9 \\ \hline 3 \quad 6 \end{array}</math> </div> 7. 次時の予告を聞く。	※計算手順を確認しながらまとめる。 ※ネーミング(〇〇作戦)を考える。 ※減加法も認めながら、まずは、減加法について学習していくことを伝える。	・児童の様子を見て、計算手順について個別に補助説明をする。

【評価場面】評価方法→ホワイトボード

[指導の具体的な手立て]

《13-9の計算の仕方を考える場面》

☆「おおむね満足できる(B)と判断される状況」：10のまとまりに着目して、操作し、数字で表している。

■「十分満足できる(A)と判断できる児童」への具体的な手立て：プリントを用いて、他の表現方法で表せるようにする。

■「努力を要する(C)と判断される児童」への具体的な手立て：操作手順を声に出させて、9をとれるようにする。